

魚がたくさん獲れれば漁師はもうかるか

水産増殖学の出身で、魚の資源量を増やすための技術を研究していたことを、知ってか知らずか、魚が取れなくて困っているから、魚がたくさん獲れるように、資源を増加するための研究をしてくれないかと言われることがある。人間だれしも、頼りにされると悪い気はしない。そういう人は、そういう意味で遠まわしに、おだててくれているつもりなのかもしれないが、こういうことを言われると、どう応えて良いのか困ってしまう。本心を言えば、魚がたくさん獲れるようになれば、漁業者や漁村が豊かになるとは思っていない。

別に分析したわけではないが実感としてそう感じる。もはや昔話に過ぎないのだが、さけます別枠研究というのがあった。北海道と本州では少し異なる研究内容で、本州では河川型放流技術の開発が主体であったと思う、河川型放流に関する最初の会合は、1977年に、塩釜にあった東北海区水産研究所で行われた。筆者はまだ大学院生だったが、この会合に参加した。教授の代理として出席したのだが、当時はまだ、大学や研究機関のランクづけのようなものがあって、最も若い大学院生が、不似合に高い席次（座長の隣）のところに座らされて、ひどく居心地が悪かったのを今でも覚えている。遠くの隅の方に同級生が心配そうな眼をして座っていた。おそらく私が最年少だったろうから、会議に参加された方々はすでにご高齢で、すでになくなられた方も少なくないのではないかと思う。

ここで、紹介された研究計画には、明確な到達目標が数値として掲げられていたのだが、その内容は当時としては信じられないほどの大風呂敷であった。筆者は直感的に無理な計画だと思った。そこで、会議後内々に座長にそんな到達目標を掲げた大丈夫なのかと尋ねたのだが、予算獲得のためには大風呂敷を広げる必要がある。誰も目標達成の可能性など信じていない。そんなことを心配するよりは、君は自分の分担分の研究をしっかりとやってくれと言うことだった。当時はまだ、サケの孵化放流などは、金を捨てているようなもので、大した効果は上がらないと思われていたのである。実は、この大風呂敷はとても大きな風呂敷で、実はまだその目標は達成されていないのだが、それはそれとして、サケの孵化放流技術が目覚ましい進歩を遂げて、多くのサケが、本州沿岸に来遊するようになった。この事実は、あまり一般に知られていないように思う。具体的に数字を挙げよう。水産庁の統計資料によれば、漁獲統計に挙げられている最初の年、1956年の岩手県のサケの漁獲量は206トンである。当時は漁獲統計システムが不備だったからだという説明もあり得るが、さけます別枠研究が始まった1977年、私が、塩釜の会議室で身を固くしながら冷や汗をかいていた年の、岩手県の漁獲量は、8,218トンである。もちろん、さけの沖獲りがなくなった。加工環境が改善されたなど、放流技術の進歩だけがその要因ではないのだが、1996年には、実に67,922トンのさけが岩手県で漁獲された。もちろん、これは獲れすぎかもしれない。しかし、単純計算で、1956年の300倍、1977年の8倍である。大震災があった

年の漁獲量は、9,174 トンであり、それでも、1977 年よりは多い。ちなみに、2010 年は 18,158 トンである。2000 年代を通じてみると、ほぼ、安定して、25,000 トンぐらい、あるいはそれ以上の漁獲量である。つまり、最近はやや低下傾向にあるとはいえ、岩手県では、ここ 40 年ぐらいの間に、サケが獲れるようになったのである。これは、事実である。それなのに、漁業者は貧困にあえいでいて、漁村は衰退しつつあるということが盛んに言われている。もし、漁業者や漁村の貧困化も事実だとするならば、結論は明快で、魚が取れるようになって、漁業者は豊かにならないということになる。

別に、岩手県でとれる水産物はサケだけではないだろうという批判はあり得る。では、ワカメ、カキ、ホタテのどの生産量の経年変化はどうなっているのだろうか。また、生産量が変わらないにしても、漁業者数は減少している。となれば、一人当たりの収入は増加していなければおかしい。最も研究しなければならないのは、魚の資源をどのように増やすのかではなくて、魚が増えても漁師が儲からないのは何故かではなくてはならない。そうした視点からすると、漁業や漁業資源に関する最近の論争、水産庁の政策、全漁連の対応、どれをとっても問題の本質を捉えていない。この話は、私にとって苦い話でもある。私は研究的には「つくる漁業」の継承者だと思っている。そのようなものとして、「つくる漁業」の功罪、現代的な意味づけを問い続けなければならないと思っている。「つくる漁業」は、それだけでは、人々を豊かにしない。